

GIC Discussion Paper

Center for Global Innovation Studies, Toyo University

No. 30

2026 年 6 月

[ワーキングペーパー]

GIC インデックス検討座談会 ーランキングを政策形成にどう活かすかー

杉谷 和哉 岩手県立大学総合政策学部准教授

市川 顕 東洋大学グローバル・イノベーション学研究センター長

スルトノフ・ミルゾサイド 東洋大学グローバル・イノベーション学研究センター副センター長

劉 文君 東洋大学グローバル・イノベーション学研究センター副センター長

山崎 周 東洋大学グローバル・イノベーション学研究センター副センター長

野崎 浩成 東洋大学グローバル・イノベーション学研究センター運営委員

御代田 有希 東洋大学グローバル・イノベーション学研究センター運営委員



TOYO UNIVERSITY

GIC Discussion Paper は、グローバル・イノベーション学研究センター所属の研究員、客員研究員および外部研究者による研究成果をとりまとめたもので、学界、研究機関等、関連する方々から幅広くコメントを頂き、今後の研究に役立てることを意図しています。

本稿は、2026 年 5 月 9 日に Zoom で開催された「GIC インデックス検討座談会」における報告、および討論をもとに作成されたものです。報告および発言は、それぞれ報告者・討論者個人の見解に基づくものであり、所属機関の見解を示すものではありません。

グローバル・イノベーション学研究センター
センター長 市川 顕

GIC インデックス検討座談会

ーランキングを政策形成にどう活かすかー

2026 年 5 月 9 日（金）に、Zoom にて、東洋大学グローバル・イノベーション学研究センター（GIC）主催の「GIC インデックス検討座談会ーランキングを政策形成にどう活かすかー」が開催された。

本座談会では、岩手県立大学総合政策学部准教授の杉谷和哉氏を報告者としてお招きし、GIC が作成したグローバル・イノベーション・ランキングを、公共政策学・政策評価論の観点からどのように読み、政策形成へどのように活用し得るかについて検討した。

本誌では、杉谷氏による報告を掲載すると同時に、市川顕センター長とのクロストーク、および GIC 運営委員を交えたフリーディスカッションの内容を収録する。

本座談会は、開会・趣旨説明、杉谷氏による報告「グローバル・イノベーション・ランキングについての論点」、市川氏と杉谷氏によるクロストーク、参加者によるフリーディスカッションの順に行われた。

参加者（文字起こし上の発言者）

市川 顕 GIC センター長／東洋大学国際学部教授

杉谷和哉 岩手県立大学総合政策学部准教授

山崎 周 東洋大学国際学部准教授（国際政治学・中国対外政策）

御代田有希 東洋大学国際学部講師（グローバルガバナンス／サステナブルファイナンス）

スルトノフ・ミルゾサイド 東洋大学国際学部教授（国際経済）

野崎 浩成 東洋大学国際学部教授（ファイナンス）

劉 文君 東洋大学 IR 室 教授（高等教育・教育政策）

[報告]

グローバル・イノベーション・ランキングについての論点

杉谷和哉（岩手県立大学）

Abstract

本報告では、GIC が作成したグローバル・イノベーション・ランキングを、公共政策学・政策評価論の観点からどのように読み、どのように政策形成へ活用し得るかが検討された。ランキングは、現状を可視化し、政策課題を発見するうえで有用な道具である一方、順位そのものを目的化することには慎重であるべきである。とりわけ、指標の重み付け、指標間のトレードオフ、所与の条件と変えられる条件の峻別、そして「健康診断」としての指標マネジメントが重要な論点として示された。さらに、激変する国際環境の下では、ランキングを固定的な評価表としてではなく、アジャイル型の政策形成・評価につなげるための情報資源として用いる必要があることが論じられた。

1. はじめに

岩手県立大学の杉谷でございます。本日はこのような機会をいただき、ありがとうございます。私は公共政策学、政策評価論を専門としておりまして、特に EBPM（Evidence-Based Policy Making）、つまりエビデンスによって意思決定を改善する方法について研究しております。

政策の世界では、数字や指標を使って現状を把握し、それに基づいて意思決定を行うことが重視されるようになっていきます。ただし、数字を使うことそれ自体が良い政策を保証するわけではありません。むしろ、数字の読み方を間違えると、本来は政策を良くするための道具であるはずの指標に、政策の側が振り回されてしまうことがあります。

本日は、GIC が作成したグローバル・イノベーション・ランキングについて、ランキングをどのように捉えるべきか、そしてこのランキングから日本の現状と課題をどのように読み取ることができるのかをお話ししたいと思います。

2. 自己紹介と研究上の関心

まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。私は京都大学大学院人間・環境学研究科の博士後期課程で研究し、博士（人間・環境学）を取得しました。その後、京都文教大学の非常勤講師、京都大学大学院文学研究科の特定研究員などを経まして、現在は岩手県立大学総合政策学部で准教授をしております。

専門は公共政策学と政策評価論です。近年は、EBPM をめぐる議論に関わってきました。EBPM というと、単に「データを使えばよい」と理解されることもありますが、実際には、どのようなエビデンスを、何のために、どのような制度的文脈の中で使うのが重要です。

こちらに示しているのは、これまでの著書などです。EBPM や政策過程、政策評価に関する仕事を通じて、政策におけるエビデンスの使い方、また数字や評価指標が政策の現場でどのような意味を持つのかを考えてきました。

著書など

- ・専門はEBPM（Evidence Based Policy Making）
- ・エビデンスによって意思決定を改善する方法



資料1 杉谷和哉先生の著書等

最近の仕事としては、EBPM に関する講義や研修、オンライン教材、メディアでの発信などにも関わっています。こうした経験からも、指標やランキングは、専門家だけのものではなく、行政、大学、企業、市民を含む多様な主体が政策を考えるための共通言語になり得ると感じています。

最近の仕事



資料2 杉谷和哉先生の近年の研究・教育活動

3. 「ランキング」とは何か

それでは、ランキングとは何かというところから始めたいと思います。ランキングとは、様々な指標を統合して、それを一つの序列として示すものです。複雑な現実を一目で分かる形に可視化するという意味では、非常に強い力を持っています。

ただし、ランキングは便利であるがゆえに、使い方には注意が必要です。ランキングを見ると、どうしても一位、二位、三位という順位に目が行きます。しかし、本当に重要なのは、その順位が何を意味しているのか、その順位の背後にどのようなスコアや指標があり、それがどのような社会的・制度的条件を反映しているのかという点です。

たとえば、ある国の順位が少し上がった、あるいは少し下がったというだけで、その国の政策が成功した、あるいは失敗したと判断することは危険です。ランキングはあくまで現状を分かりやすく可視化する道具であって、それ自体が政策目的になるわけではありません。

4. 大学ランキングの「七つの大罪」

ランキングの問題を考えるうえで、大学ランキングに関する研究は参考になります。Soh (2017) は、世界大学ランキングをめぐる問題を「七つの大罪」として整理しています。

例) 大学ランキング「七つの大罪」

• Soh(2017) における批判

- ①疑似精度：わずかな違いが左右する
- ②重みづけの乖離：実態と違う処理
- ③相互補完の仮定：異質な指標間の問題
- ④指標の冗長性：似た情報を繰り返し採用
- ⑤システム間の不一致：ランキング間での不一致
- ⑥指標スコアの軽視：順位にだけ注目がいってしまう
- ⑦順位とスコアの不一致：順位の上昇とスコアの改善が一致しない



資料3 大学ランキングをめぐる「七つの大罪」

第一に、疑似精度の問題があります。わずかな数値の違いが順位を左右し、その差があたかも大きな意味を持つかのように見えてしまうという問題です。第二に、重みづけの乖離です。複数の指標を統合するとき、どの指標にどの程度の重みを与えるのかによって結果は大きく変わります。第三に、相互補完の仮定があります。異質な指標を足し合わせるとき、ある項目の弱さが別の項目の強さで補えるように見えてしまう。しかし、実際には補えないものもあります。第四に、指標の冗長性です。似たような情報を何度も採用してしまうと、特定の側面が過大評価されてしまいます。第五に、システム間の不一致です。ランキングが違えば、同じ対象でも評価が異なることがあります。第六に、指標スコアの軽視です。順位に注目が集まり、実際のスコアやその変化が見落とされる。第七に、順位とスコアの不一致です。スコアは改善しているのに、他の国や大学も改善しているため順位が上がらないということが起こります。

これは大学ランキングだけの問題ではありません。国際比較のランキング一般に当てはまる問題です。したがって、GICのランキングについても、順位を見るだけでなく、どの指標がどのように構成され、何をどの程度重視しているのかを丁寧に読む必要があります。

5. ランキングを活用する際の留意点

完全無欠なランキングは存在しません。したがって、ランキングを見るときには、「どのスコアを、どの理由で重視するのか」を明確にする必要があります。これは、何を目的にランキングを使うのかによって変わります。

たとえば、岩手県立大学と東京大学を同じ大学ランキングで比較することは形式的には可能です。しかし、両者に社会から期待されている役割は全く違います。研究大学として世界的な競争力を示すことが求められる大学と、地域社会に密着し、人材育成や地域課題解決を担う大学とでは、評価すべき軸が違って当然です。

同じように、国のイノベーション力を評価するときにも、単純に順位を上げることだけを目的にしてよいのかを考える必要があります。どのような社会を目指すのか、どの価値を重視するのかによって、注目すべき指標は変わってきます。

6. グローバル・イノベーション・ランキングの読みどころ

GIC のグローバル・イノベーション・ランキングの面白いところは、「イノベーション」という非常に広く、抽象的な概念を、計量可能な数値に分解している点です。イノベーションという言葉は便利ですが、そのままでは何を指しているのか曖昧です。それを複数の項目に分け、国際比較可能な形にしている点に、このランキングの意義があります。

また、日本の相対的な立ち位置を可視化するうえでも有用です。日本はどの領域で比較的強いのか、逆にどの領域で弱さがあるのか。それを一つ一つ見ていくことで、日本が現在抱えている課題を考える材料になります。

7. 日本の相対的な優位点と課題

日本の相対的な優位点としては、貿易自由度・開放度、投資力、知識基盤などが挙げられます。これらはランキング上でも非常に高い位置にあります。また、先進技術インフラ、交流実績、政治の安定性なども、日本がなお一定の強みを持っている領域として見ることができます。

これは、日本のイノベーションの基盤となるハード面が、思った以上に健闘していることを示していると思います。インフラ、知識基盤、投資環境など、日本がこれまで蓄積してきた制度的・経済的基盤は、まだ十分に評価され得るものです。

一方で、課題も明確に見えています。環境対応、スタートアップ、人間関係資本、多様性・受容力、財政力などは相対的に低い位置にあります。とりわけ、スタートアップや多様性、ジェンダーギャップなどのソフト面は、日本のイノベーション力を考えるうえで避けて通れない課題です。

ここで大事ななのは、低い項目があるからといって、ただちに「そこを上げればよい」と考えないことです。どの項目が政策によって変えられるのか、どの項目は人口動態や歴史的制度のように短期的には変えにくいのかを区別する必要があります。

8. 変えにくい条件と変えやすい条件

日本の構造的な問題、つまり変えにくい点としては、人口の急激な減少、出生率の急減、超高齢化社会などがあります。これらは重要な問題ですが、政策によってすぐに変えられるものではありません。また、イノベーションの基盤となる大学の弱体化、大学の資金調達をどう考えるかという問題もあります。

大学の資金調達については、上山隆大氏の『アカデミック・キャピタリズムを超えて』なども参考になります。大学が知識基盤として機能するためには、単に研究者の努力だけではなく、制度的・財政的な支えが必要です。

他方で、変えられる可能性が比較的高い点もあります。その一つが多様性の問題です。日本社会は今後、急激な変化を迎えます。その変化の中では、摩擦も当然起こります。問題は、その摩擦をどのように受け止め、どのような制度や教育を通じて対応していくかです。

この点で、大学で何を教えるのか、研究者は何を社会に向けて発信するのも重要になります。「学問」の場と「教育」の場は時に緊張関係にあります。ランキングで見えてくる社会課題を、教育や研究にどうつなげるのかが問われていると思います。

9. 激変するグローバル状況

さらに、ランキングを読む際には、グローバルな状況が大きく変わっていることも考慮する必要があります。現在、米国、ロシア、中国はいずれも、ある意味で「帝国主義」的な政策を強めています。国際秩序は不安定化し、貿易問題も浮上しています。

このような状況では、サプライチェーンの再構築や見直しが不可欠になります。政策の外部要因はますます不透明になっており、因果関係を見通すことが難しくなっています。政策評価の言葉で言えば、交絡因子が増えているということです。

ある政策の成果が出たとしても、それが本当にその政策の効果なのか、それとも外部環境の変化によるものなのかを見極めることは簡単ではありません。したがって、ランキングを読むときにも、単年度の順位やスコアだけを見るのではなく、国際環境の変化と合わせて解釈する必要があります。

10. ふたたび、ランキングを考える

ここでもう一度、ランキングの話に戻ります。ある特定の指標を改善しようとする、他の指標が悪化する可能性があります。たとえば、人口問題の解決のために安易な移民政策を取れば、労働力不足には対応できるかもしれませんが、それが社会的摩擦を生み、政治の安定性を損なう可能性もあります。

つまり、ある指標だけを良くすることが、全体として望ましい結果をもたらすとは限りません。ランキングの数値は健康診断のようなものだと考えると分かりやすいと思います。健康診断である数値が悪いからといって、その数値だけを改善することに集中しすぎると、かえって健康全体を損なうことがあります。

同じように、政策においても、ある特定の数値だけを見るのではなく、指標間の相互作用を考慮する必要があります。ランキングは、単一の順位表ではなく、複数の症状を示す診断結果として読むべきです。

11. ランキングの賢い使い方

ランキングを賢く使うためには、指標の統合はフラットにはできないということを認識する必要があります。すべての項目を網羅し、すべてを完璧に反映するランキングを作ることは不可能です。したがって、何に注目するのか、何のために使うのかを明確にすることが重要です。

ランキングは、大まかな方向性を把握するための重要な情報です。ただし、それを固定的な評価表として使うのではなく、政策形成・政策評価の出発点として使うべきです。その意味で、ランキングはアジャイル型政策形成・評価と接続し得るものだと思います。

アジャイル型政策形成というのは、政策を一度決めたら終わりにするのではなく、状況の変化に応じて修正しながら進めていく考え方です。ランキングは、その修正のための手がかりになります。

どこに問題があるのか、どこに変化が起きているのかを定期的に確認することで、政策の方向を調整することができます。

12. 「健康のために死なない」

最後に、少し逆説的な言い方ですが、「健康のために死なない」ということを申し上げたいと思います。ある特定の数値の改善だけを追い求めると、他の指標との相互作用を見落としてしまうことがあります。もちろん、全てを完全に把握することはできません。しかし、考えられる相互作用については、できる限り考える必要があります。

ここで参考になるのが、フィリップ・テトロックの『専門家の政治予測』です。専門家の予測はたいてい当たらない、というやや厳しい話ですが、重要なのは、自説に固執するのではなく、幅広く見ることです。ただし、予測を頻繁に変えすぎても逆効果です。

政策形成においても同じで、ランキングを見てすぐに一喜一憂するのではなく、一定の方向性を持ちながらも、必要に応じて見直す。そのような使い方が望ましいのではないかと思います。GIC のランキングは、日本のイノベーション政策を考えるための入口として非常に有効です。しかし、その価値は順位そのものにあるのではなく、そこからどのような問いを立て、どのような政策論議につなげるかにあるのだと思います。

参考文献

テトロック, フィリップ・E. (2022) 『専門家の政治予測：どれだけ当たるか？どうしたら当てられるか？』 桃井緑美子・吉田周平訳、みすず書房。

Soh, Kaycheng (2017) "The Seven Deadly Sins of World University Ranking: A Summary from Several Papers", *Journal of Higher Education Policy and Management*, 39(1), pp. 104–115. DOI: 10.1080/1360080X.2016.1254431.

[クロストーク]

GIC インデックスは「順位表」か「政策診断ツール」か

市川 杉谷先生、ありがとうございました。議論に先立ちまして、GIC がこのランキングをどのように考え、どのように使おうとしているのかについて、少し補足したいと思います。おっしゃる通り、ランキングを上げるための対応は、ある程度できてしまいます。大学入試で公式を覚えれば問題は解けるけれど、それで知性が本当に上がったのかは別問題であるのと同じです。GIC としても、日本の総合順位が二十何位であるとか、中国や韓国より高いのか低いのかという点は当然見えています。しかし、それ以上に、大項目・中項目・小項目を見ながら、日本がどの領域で相対的に強く、どの領域で弱いのかを把握する材料として使っています。たとえば人材に関する項目で TOEFL iBT の国別平均スコアが非常に低く出ています。しかし、現在の学生を見ていると、昔のように文法は分かるが英語が使えないという学生だけではありません。むしろ、文法は多少不完全でも英語でコミュニケーションできる学生は増えている。そう考えると、単純に順位だけを見て、日本の英語教育は全面的に失敗していると判断するのは危険です。韓国などの国内市場が小さい国にとっては、留学や海外ビジネスがより切実な課題になります。そのため、幼少期から英語ができなければ学問もビ

ジネスもできないという社会的圧力が強い。日本の場合は、同じグローバル化の中にあっても、社会的なモチベーションや必要性の構造が異なります。ランキングの背後にある社会的条件を読まなければならないのだと思います。

杉谷 まさにその通りです。ランキングは可視化の道具としては非常に強力ですが、その数字が何を表しているのかを解釈しなければなりません。順位の上下だけを政策目標にしてしまうと、政策の本来の目的が見えなくなります。GIC インデックスの価値は、順位表としてではなく、日本のイノベーション政策を考えるための論点を整理できるところにあると思います。

市川 その意味で、今後はアジャイル性、つまり政府や民間が状況変化に応じて政策や戦略を変えられる能力をどのように指標化するかも重要だと感じました。日本には、いったん「正しい」とされた政策が非常に粘着的に残り続ける傾向があります。政策変更のしやすさ、あるいは複数の政策オプションが準備されているかどうかを測る指標があってもよいのではないかと思います。

杉谷 アジャイル型政策形成は非常に重要ですが、日本で急に実現するのは難しいと思います。デジタル庁などは、リアルタイム・データを把握するためのダッシュボードを整備しようとしています。これは、政策を運転するための速度計のようなもので、アジャイル型政策形成のインフラになり得ます。しかし、ハード面が整備されても、政策を実際に変更する文化や制度がなければ機能しません。日本では、政策評価制度が導入されてから二十年以上経ちますが、政策の無謬性、つまり「政策は間違っていない」という前提はなかなか変わっていません。アカウンタビリティも、単なる説明責任というより、本来は「なぜその政策を行ったのか」「間違っていた場合に誰がどのように責任を取るのか」を問う仕組みです。しかし、現実には評価文書が大量に作られても読まれず、行政内部で予算を維持するための形式的情報になってしまうことがあります。

市川 つまり、ランキングや指標を整備するだけでは不十分で、それを政策変更につなげる政治的・行政的・市民的条件が必要だということですね。

杉谷 そうです。GIC インデックスは、その条件を考えるための材料を提供できると思います。政府や行政がアジャイルに動くための情報源、あるいは政策オプションのリソースとして、ランキングのデータやメタデータを活用できる可能性があります。

[フリーディスカッション]

日本のイノベーション力をどう捉えるか

市川 それでは、GIC の先生方からコメントや質問をいただきたいと思います。山崎先生、お願いいたします。

山崎 貴重なお話をありがとうございました。私は国際政治学、とくに中国の対外政策を研究しています。分野は異なりますが、大学ランキングとの向き合い方という点で非常に興味深く伺いました。中国を見ていると、日本と大きく違うのは、新しいものがあればまず取り入れてみるという姿勢です。電気自動車の BYD などそうですが、とりあえずやってみるという社会的風土が強い。日本では、起業や新しい試みに対して慎重で、場合によっては抑制的な雰囲気があるように思います。日本で新しいことをより自由に試せる土壌をつくるには、どのような条件が必要でしょうか。

杉谷 中国には確かに、政策的にも文化的にも、新しいものを一気に取り入れる面があると思います。ただ、日本も新しいことを全くしないわけではありません。大学ガバナンス改革などでも、新しい改革は繰り返し掲げられてきました。問題は、新しいことをしないことよりも、一度決めたことをうまく変えられないことにあるのではないかと思います。中国の場合、欧米のルールに乗っかってみて、それが自分たちにとって不利だと分かれば、独自のルールを作る方向へ素早く転換する。つまり損切りが早い。日本では、いったん決めたことを最後までやろうとする力は強いのですが、失敗したと分かった時に「これは失敗でした」と明確に言うことが難しい。政策評価でも、失敗を認めると責任問題になるため、曖昧な表現になりがちです。

山崎 ありがとうございます。まさに、政策の失敗や転換をどう扱うかという問題なのだと思います。

指標、サステナビリティ、トレードオフ

市川 続いて、御代田先生、お願いいたします。

御代田 ありがとうございました。私は国際関係論、特に非国家主体を含むグローバルガバナンスに関心を持っており、サステナブルファイナンスや ESG 投資について研究してきました。今日のお話を伺って、GIC インデックスの議論は、ESG 評価やサステナブルファイナンスで起きている問題と非常に近いと感じました。ESG 評価では、財務情報ではない環境・社会・ガバナンスに関する企業の取り組みを指標化し、それを投資行動に活かそうとします。しかし、複数の大手の評価会社が同じ企業を評価しても、同じ項目であるはずなのに相関が非常に低いことがあります。投資家は、どの評価を信頼すればよいのかという問題に直面します。結局、それぞれの評価会社の癖やロジックを理解したうえで、自社の評価と組み合わせる使うことになります。

もう一つ重要だと思ったのは、指標間のトレードオフです。SDGs でも、一つの目標を進めると別の目標に負の影響が出ることがあります。本来、サステナビリティとは、環境・経済・社会の三つをバランスさせる考え方です。したがって、ある項目だけを選んで掲げると、チェリーピッキングになってしまう恐れがあります。GIC の文脈でも、水・気候変動・エネルギーのネクサスのように、複数の領域を同時に考える必要があると思いました。

最後に、アジャイル型ガバナンスについて伺いたいと思います。AI など不確実性の高い領域では、アジャイルな政策形成が重要だと言われます。しかし、従来の日本の政策形成のあり方を見ると、急にアジャイルに移行するのは難しいのではないかと感じます。政策研究の観点から、現在どのように発展しているのでしょうか。

杉谷 ESG 評価とサステナブルファイナンスの話は非常に興味深いです。まさに、複数の評価システムが異なる結果を出すという問題は、ランキング一般に共通します。また、SDGs のトレードオフの話も重要です。一つの指標だけを改善しようとすると、他の領域に悪影響が出る可能性があります。アジャイル型政策形成については、まずリアルタイム・データの整備が必要です。政策がいまどの程度進んでいるのかを把握するダッシュボードのようなものがなければ、機動的な修正はできません。その意味で、デジタル庁などが進めているデータ基盤の整備は、アジャイル型政策形成のインフラと言えます。しかし、問題はソフト面です。データがあっても、政策を変えるインセンテ

イブがなければ変わりません。政策評価が市民や政治に十分読まれず、行政内部の形式的作業になってしまうと、政策を修正する圧力が働きません。したがって、アジャイル型政策形成には、データ基盤だけでなく、アカウンタビリティ、市民の関心、教育、そして政策を変更してもよいという制度文化が必要です。

市川 今の論点は、GIC インデックスにも十分組み込めていなかった部分だと感じます。アジャイル性を測る指標、つまり政府や民間が政策を変更しやすい条件をどう可視化するかは、今後の重要な課題になり得ると思います。

人口構造、起業、そして市民社会

市川 続いて、スルトノフ先生、お願いいたします。

スルトノフ 私は国際経済を専門にしています。ランキングや比較データは授業でも研究でもよく用いますが、日本の場合は、人口構造、高齢化、出生率の低さ、一人当たり所得の相対的低下などが非常に気になります。杉谷先生から見て、GIC インデックスの中で特に気になった点、あるいは入っていないが重要だと思われる点があれば教えてください。

杉谷 まず、ポジティブな驚きとして、ハード面が意外に健闘している点があります。インフラや貿易自由度、投資、国際会議など、日本がまだ強みを持っている領域が見えました。一方で、アントレプレナーシップやスタートアップ、参入障壁といった領域は、やはり課題として見えます。大学でもスタートアップ支援は盛んに語られていますが、それがどこまで実質的な成果につながっているのかは、さらに考える必要があります。入っていない可能性があるものとしては、市民社会の活力があります。政策に影響を与える市民団体の存在、ソーシャル・キャピタル、あるいは民間団体における女性リーダーの数なども、イノベーションを支える条件として重要かもしれません。ジェンダーギャップ指標や女性管理職比率に含まれている可能性はありますが、より広い意味での市民社会の力をどう測るかは検討の余地があります。

市川 地域のアントレプレナーを見てみると、女性が非常に多いと感じます。東京中心部にいるようなスタートアップ投資家のイメージとは違い、ローカル・アントレプレナーには強い信念を持って地域で事業を進める女性が相対的に多い。その意味でも、女性リーダーや市民社会を指標にどう入れるかは興味深い論点です。

ランキングの一貫性と改定可能性

市川 野崎先生、お願いいたします。

野崎 杉谷先生のお話で、頭の中が非常に整理されました。コメントとしては、まず、このインデックスがどのように使われるのかというゴールを決めたうえで、帰納法的にデザインしていく必要があるという点がよく分かりました。また、アジリティ、すなわちアジャイル性が、政策の設定や評価にとって重要だという点にも同意します。質問は、指標や重み付けを大きく変えた場合、時系列的な一貫性が損なわれるリスクをどう評価すべきかという点です。不確実性が高い状況では指標の見直しも必要ですが、毎年変えてしまうと比較できなくなる。この点をどう考えればよいでしょうか。

杉谷 非常に本質的な論点です。自治体の総合計画のマネジメントでも、「この指標はおかしいから変えた方がよい」という話になります。しかし、変えると前年度との接続がなくなります。急に数値が改善しても、それは政策の成果ではなく指標を変えたからだと言われてしまう。これはランキングでも同じです。一つの方法は、主要指標は継続しつつ、別立てで補助的な指標や解題を加えることです。ランキング本体は一定の一貫性を保ち、同時に「この観点から見ると別の解釈もできる」という情報を提供する。年度ごとに大きく変えるのではなく、改定時期を明確に設けて見直す方法も考えられます。さらに言えば、GIC インデックスは、政府のアジャイル型政策形成を助ける情報源にもなり得ます。ランキングのデータだけでなく、どの指標がどのような意味を持つのか、どのような限界があるのかというメタデータを公開することで、省庁、政治家、研究者、市民が政策オプションを検討するための材料になります。

市川 この議論はとても重要だと感じます。コロナ以前は、GIC のランキングを出した後に「解題」を付けていました。ランキングには含まれていない別の指標を使うと、少し違うものの見方ができるということを示すためです。最近忙しさもあり十分に対応できていませんでしたが、やはり運営委員の先生方を中心に、「解題」をいただくことは必要だと感じました。

大学ランキング、中国の利用戦略、博士人材

市川 最後になりましたが、劉先生、お願いいたします。

劉 私は高等教育政策、職業教育、専門教育などを研究してきました。教育分野でも、近年は文部科学省が全国的な学生調査を進めており、各大学の教育の質をベンチマークする動きがあります。

「ランキング」という言葉には反発があるためベンチマークと呼ばれますが、実質的には平均値や比較指標によって教育の質を可視化しようとしています。その意味で、GIC インデックスは現在の政策潮流に合っていると感じます。一方で、大学ランキングについては、中国は非常に賢く利用していると思います。清華大学や北京大学のようなトップ大学は、ランキングを自信やプライドを示す材料として積極的に使います。しかし、関係のない大学、あるいは上位に入れない大学は、そもそも参加しないこともあります。日本では、大学の実態や目的に合っていないランキングにも参加してしまい、労力だけがかかり、かえってマイナスになることがあるのではないかと感じています。また、政策や大学の意思決定を誰が行っているのかも重要です。日本の官僚や大学職員に博士号取得者が少ないことは、政策形成や大学経営に影響しているのではないのでしょうか。教員は博士号やポストドクター経験を持ち、専門性を高めていますが、大学経営の側では必ずしも同じように専門性が制度化されていない場合があります。ランキングを政策に活用するには、そうした人材構造の問題も考える必要があると思います。

杉谷 中国のランキングへの向き合い方は、非常に賢いと思います。「上に政策あれば下に対策あり」という言葉がありますが、まさにそのような受け止め方です。ランキングを利用できるところは利用し、不利な場合には別の戦略を取る。その柔軟性は、日本との大きな違いだと思います。博士号取得者や専門職人材の活用についても重要です。文部科学省でも博士人材を活用しようという話は出ていますが、日本ではジョブ型雇用になりにくく、官僚もローテーションで幅広く経験することが重視されます。そのため、専門性の高い人材をどのように行政や大学運営に組み込むかは、大学だけでは解決しにくい問題です。ただし、今後変わっていく可能性はあると思います。

市川 私が所属する学科（国際学部グローバル・イノベーション学科）では、外国人学生と日本人学生を英語で一緒に教えています。外国人学生は学部卒業後に修士課程へ進むことを前提にしている場合が多い。一方、日本人学生は多くが学部卒業後に就職します。私自身、欧州でフィールドワークをしていると、基礎自治体の都市計画担当者の名刺に Ph.D.と書いてあることもあります。学歴、大学院進学、専門人材の活用は、長期的には大きな違いを生む問題だと感じます。

結語

市川 本日は、非常に内容の濃い、白熱した議論ができました。GIC インデックスを単なる順位表としてではなく、日本の政策課題を発見し、政策オプションを考えるための診断ツールとして活用していく必要があることが確認できたと思います。杉谷先生、参加者の皆様、ありがとうございました。